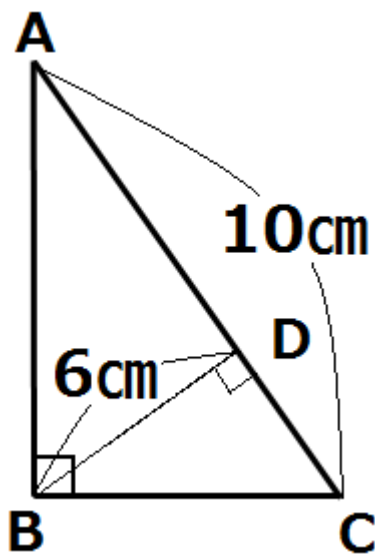


サイエンス通信 (8)

マイクロソフトの入社試験

図1



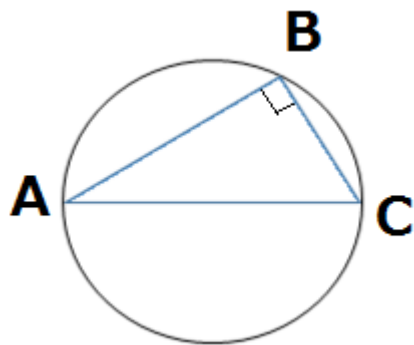
マイクロソフト社の入社試験、最終選考で図1のような三角形の面積をを求める問題が出題されたそうです。

超一流企業でも、基礎基本がしっかりした人を求めているということなのでしょう。答えは当然、 30cm^2 ですね。

実は違います。なぜかわかるでしょうか。実はこの三角形、この世には存在しません。なぜかわかるでしょうか。中学校の中心角と円周角の知識を活用すれば証明できます。

$\angle ABC = 90^\circ$ を円周角と考えると、中心角は 180° になります。つまり線分 AC は円の直径に相当することになります。図示すると図2のようになります。

図2

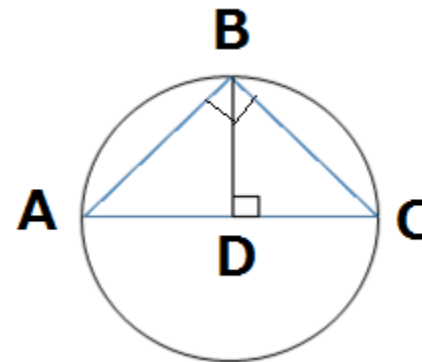


次に点 B から線分 AC に直角に交わる線を引き、その交点を D とします。図示すると図3のようになります。そして線分 BD の長さについて考えてみます。

図3の BD は図1の BD と同じです。図3で線分 BD が最大になるのは線分 AC の中点、つまり円の中心に D がきたときです。このとき線分 BD は円の半径に相当します。円の半径は線分 $AC = 10\text{cm}$ より、 5cm とわかります。

つまり図1の三角形の線分 BD の最大の長さは 5cm で、 6cm はとれないのです。よって問題の答えは「図1の三角形は存在しないため、面積は求めるこ

図3



とができない。」となります。

とんだ意地悪問題に思えますが入社試験の、しかも最終選考で出題するからには何か考えがあるはず。この問題のポイントはこの三角形があるか、ないかの問いを自ら立てなければならないことです。

これは現実社会そのものではないでしょうか。現実社会では「～について答えよ」などという問題はだれも与えてく

れません。自分で問いを立て、自分で解答していかなければなりません。しかも他人に説明できるように論理的に行わなければなりません。マイクロソフトはそのような現実社会に対応できる人間を採用したいと思い、このような問題を出したのではないのでしょうか。

ところで、現実の社会はもっと複雑です。その問いの価値や自分の出した答えの価値を自分で判断しなければなりません。もちろん自分で立てた問いや答えです。自分では満点の評価でしょう。しかし社会はどのように思うのでしょうか。社会といっても人それぞれです。満点をつける人もいれば0点の人もいるかもしれません。マイクロソフトの入社試験もさすがマイクロソフトと絶賛する人から、意地悪な点を批判する人まで様々でしょう。但し、0点が悪いわけではありません。科学の歴史を振り返れば、発表当初は奇抜すぎてだれも信じない学説が、後々だれもが信じる学説になるということは多々ありました。

サイエンス創造科では2年生で課題研究に取り組みます。そこでは自ら課題を設定し、答えを論理的に導いていくことを1年かけて行います。最後に成果発表を行います。いいかえれば現実社会で生きていく力を養う時間といえましょう。考えることが好きなら暗記が苦手でも大丈夫です。社会で通用する力を身に着けたいと思ったら、文系理系を問わずサイエンス創造科に来てください。社会から必要とされる力を自分自身で身に付けていくことができるでしょう。(きみの)